（映画芸術原稿）

田村孟さんの想い出

前田陽一

この世に田村孟さんという人がなかったら、私は映画にはおらず、全く別の人生を送っていただろう。界

私は子供のころから映画を観るのは大好きだったが、映画監督を職業にしたいとは露ほども考えたことはなかった。なろうとしてもなれるものではないと思っていた。

大学卒業が迫ったころ、生家の倒産がからんだりして、就職が切実な問題になった。しかし、今以上の就職難の上、怠けていた大学生活のむくいが来て、受けるところは片っぱしに落された。

最後に受けたのが松竹の助監督試験であった。しかし、これはもう最初からあきらめていた。昭和二十三年といえば日本映画、松竹

コクヨ ケ-35 20×20

ともに最盛期のころで、八人採用のところへ四千人が殺到していたからである。

当時、助監督の採用試験は、大幅に助監督部の自主制にまかされ、試験問題も作成していた。そして助監督部の方針としては、映画のことだけに偏執的にくわしい人間は採るまい、ということがあったらしい。その せいか、映画に関する問題はひとつも無かったと記憶している。英語、常識問題、論文の他に創作問題というのがあった。二枚の写真が受験者全員に配られ、一枚を選んで、何でもいいから話を作れという問題であった。風景写真と人物写真だったが、私は人物写真の方を選んだ。それは[illegible]、老若、国籍が不明な長いちぢれ毛の落ち着いた男が、何か棒のようなものを口にくわえている上半身像であった。

私はインドシナ戦争で発狂したフランス兵が人肉を喰っている場面を想定してストーリイを書き、「骨と夕陽」という題をつけたこ

コクヨ ケ-35 20×20

とだけ書えている。

半月ほど経って筆記試験の合格の通知べきた。

思いがけないことに私はびっくりし、かつ、急に欲が出てきた。

そして不安になった。それ以前に受けたサンケイ新聞社と主婦の友社（！）はいずれも筆記試験は合格したのに面接で落されていたからである。

緊張して面接試験場にいくと、所長、監督たちとの面接のあと、助監督の試験委員との面接があった。試験委員のまわりには、ひやかし半分の助監督たちが二十人ばかりもいて私を注視しているので、気味悪かった。

そのとき、真中にふんぞりかえった眼鏡をかけた小柄な男が大声で、「ぼくは君が来るのを待ってたんだよ！」と呼びかけてきた。これが田村孟さんであった。何か試されているのか、と身構えている私に、彼は好意まるだしの表情で、私の書いた創作を賞めあげてくれた。彼一人がしゃべりまくり、あとは二、三散発的に質問が出ただけで面接は終った。

合格者の採否の鍵は助監督部から選出された

コクヨ ケ-35 20×20

若い試験委員が振っていた。

ってくれた田村さんは、百点満点のところ百二十点をつけろとムチャクチャを言ってまで、私を強く押してくれたらしい。その押しの強さによって、聞くところによると合格者八人の中のビリで、ギリギリ引っかかったのであった。

驚くべきことに、このとき田村さんは東西の撮影所百二十人ほどもいた助監督の中で、会社歴三年、最も新米のクラスに属していたのであった。このことは彼がいかに自信満々で押しが強く、また、先輩の助監督から一目おかれていたかということを示している。

私が入社して間もなく、小林正樹監督の助監督を一緒にやったことがある。現場で田村さんは演出に関する意見をうるさいくらい何度も監督に進言していたが、一度も採用されず、「あの監督はダメだね」と不満そうであった。

助監督にたむろしていると、誰かの足音が近づいてくる。すると大島渚さんが「あの

若い試験委員たち

山番のとき、

私の創作を高く買

足音は、田村だよ」という。すると、それが当たるのだった。彼は足音まで、確信に満ちていた。

一度、田村さんたちと大船駅前で飲んでいた折、チンピラたちにからまれて、やむなく応戦せざるを得ないことがあった。そのとき、血まみれになって最後まで戦したのは彼であった。

当時、若い助監督の間で、「無限に○○しよう！」という言葉がよくかわされた。「今日は無限に飲もう！」「無限に議論しよう！」というふうに。それは、頭上にのしかかった重い蓋をなんとか押しのけようとする掛け声のようでもあった。田村さんが一番この言葉をよく使っていた。彼と吉田喜重さんは、南↓助監督部きっての論客だったが、二人が無限に飲みながら無限に議論しているのを、私は口ケ宿の寝床の中でウツラウツラとよく聞いたものである。

田村さんが唯一本だけ監督をして玉砕した〈？〉「悪人志願」という作品のことが忘れ

コクヨ ケ-35 20×20

られない。

私はその映画を場末の映画館で観た。ちょっと乱暴なシナリオであり演出だったが、やりたいほうだいのことをやり、企業の中で作られた映画としてはめずらしい「絶映画」であった。六十年安保のほとばしりがさめぬ頃にもつくられた映画で、作者の歯ぎしりが聞こえてくる。一種の大衆批判が込められていたように思う。私はラスト・シーンに妙に感動したのを憶えている。

飯場の労働者たちが働く石切場。無能でドモリの労働者、遠辺文雄が、今、飯場の支配者であるヤクザの津川雅彦に刺されようとしている……。石切場の崖の上では遠辺の仲間の労働者たちが、息をのんで、その光景を見つめている。彼等は遠辺を助けるだろうか。

ついに何もできない。いや、足元の小石を蹴った。その小石はカラカラと空しい音をたてて崖を落ちていった。それだけであった。

遠辺はなすところなく津川に刺されてしまう。

キャメラは何もできない労働者たちの一人

コクヨ ケ-35 20×20

一人の顔へ、作者の怒嗤の想いの限りをこめるようにひねりつつ、何回も、トラック・アップ（前進移動）をくりかえすのであった。

私はその映画を場末の映画館で観ていたが、上映が終って異常がおこった。映画館の事務所へ激昂した観客が大勢で押しかけ、「この映画はなんだ！」「金かえせ！」と血相をかえて口々にののしった。場末のせいか、労務者風の人たちが多かった。こんな光景を目撃したのは後にも先にもこのときだけである。

人間は、無意識の部分にある自分の弱点をふいにつかれたとき、怒りだすことが多いのである、と私は作品の味方になって解釈した。

その後、田村さんは大島渚さんや石堂淑朗さんと一緒に松竹を去り創造社を旗揚げした。私は数年後に監督として一本立した。

八十年代の中ごろ、田村さんと初めて一緒に仕事をする機会がきた。中公新書でベストセラーになった〈元禄御畳奉行日記〉の映画

松竹で

つくって

ク

化の話が松竹でもち上り、私に監督を依頼してきた。原作は、尾張藩で御畳奉行の役目についていた百石取りの武士、朝日文左衛門という人物の壮大な日記から著者がダイジェストして解説を加えたもので、めっぽう面白く読んだが、ここに書くには長すぎる理由で、私はその面白さを映画で表現する自信がなく、一度辞退したが、会社は脚本を担当することが決っている田村さんが〈監督は前田しかいない〉と言っていると、↓翻意をすすめてきた。すぐ田村さん本人からも電話があり、「おれにまかせろよ。引き受けなよ」という頼もしい声が伝ってきた。ここまで言われれば引き退れない。私は田村さんと組んで、全力を尽くしてみる決心をした。

しかし、この企画は実現しなかった。原因は脚本をめぐる田村さんと私との角逐だが、他にもいろいろあった。

そのあたりの顛末を田村さんは月刊シナリ

（90年12月号）に書き、それへの反論を私が次の号に書くという泥試合めいたことがあった。それは一種の兄弟喧嘩じみたところがあり、互に根にもってないことは判っているのだが、気まずさから、その後、会っていなかった。ただ、年賀状は例年どおり、中国の故事などを印刷しただけのものだったが、ある年、「ホホホ……」と一言だけ書き添えてあった。田村さんは、いったい何を私に発信しようとしていたのか定かではないが、何か、今の映画界が田村さんのもつ理念からどんどん遠ざかっていく中で、あの自信に満ちた田村さんが、ふと洩らした弱音のように思えてならなかった。

田村さんの死顔は、何十日も意識不明で眠りつづけた人とは思えぬ平常な貌で、タワシでこすれば今にも生き返りそうだった。ついその顔を撫でさすって、お別れをした。

田村孟さんの御冥福を心から祈る。

コクヨ ケ-35 20×20